

Music Education in Kindergarten,Nursery School and Elementary School : In Reference to Fröbel,Music Education of Jaques-Dalcroze

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-05-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 高牧, 恵里 メールアドレス: 所属:
URL	https://mu.repo.nii.ac.jp/records/497

幼稚園・保育園、小学校の音楽教育について

— フレーベル、ジャック＝ダルクローズの音楽教育を参考に —

Music Education in Kindergarten, Nursery School,
and Elementary School

— In Reference to Fröbel, Music Education of Jaques-Dalcroze —

高 牧 恵 里^{*}
TAKAMAKI Eri

はじめに

現在、幼稚園や保育園では、子どもの歌を使った歌唱教育や、リズムを使ったリトミック教育が行われているが、小学校の音楽教育にどのように受け継がれていくのであろうか。

幼稚園教育に尽力を尽くしたフレーベル（Fröbel, Friedrich, 1782～1852）や、リズムを使った教育を確立したジャック＝ダルクローズ（Jaques-Dalcroze, Emile, 1865～1950）の教育について研究してきたが、現場の教育にどのように生かされているか、検証したい。

1. 研究の目的

本研究は、フレーベルの「人間の教育」、及び音楽教育や、ジャック＝ダルクローズのリトミック教育を再検証し、保育所・幼稚園教育から小学校低学年までの連携教育が見られるかを検証する。（以下、J＝ダルクローズとする。）

2. 研究の対象と方法

フレーベルの「人間の教育」より、幼稚園、初等教育における音楽教育について検証する。さらに、J＝ダルクローズの「リズムと音楽と教育」からリトミック教育を再検証し、現在の日本の保育、教育における音楽教育について検証することとする。

3. フレーベルの音楽教育について

まず、「教育」とは、英語で「education」とされるが、語源である「educatus」というラテン

^{*}武蔵野大学教育学部

語が「e-（外へ）＋duc（導く）＋ate（能力を導き出すようにする）」¹であることから、「引き出す」という意味を含んでいる。ドイツ語で「Ausbildung」、フランス語で「Éducation」である。また、「教育」の語源は、広辞苑によると、「教え育てる。人を教えて知能をつけていくこと。人間に他から意図をもって働きかけ、望ましい姿に変化させ、価値を実現する活動」²としており、「教える」「育てる」は、親が子どもを育てる、養育することを意味している³。

フレーベルの教育学とは、『フレーベル全集 全5巻』を翻訳された荘司雅子氏の研究によると、「人間教育学」「母性教育学」「幼稚園教育学」の三つの柱により、構成されているとしている。

①「人間教育学」は、「人間の教育」の中に述べている、「神」「自然」「人間」の関係を勤労や作業を通して理解すること。

②「母性教育学」とは、『母の歌と愛撫の歌』の歌の中に幼児教育の要素を含み、母親から子どもへ遊びを通して伝えること。

『母の歌と愛撫の歌』は、ペスタロッチの教育学をフレーベルが受け継ぎ、母性を教育学的、かつ理論的に構想されたものである⁴。

③「幼稚園教育学」とは、恩物を使った遊びの中から創造性と象徴性と性善説（人間の本性は善であり、慈しみの心と道理にかなった方法である。）を理解しようとする教えである⁵。

「幼稚園教育学」は、2014年の教職研究センター紀要第3号に記したように、子どもが、内なる思いに目覚め、夢中になる高まりが感情や知覚と一致して活動しようとすることを正しく理解し、育まなければならないとしている。また、外から受ける感覚を体内で感じる器官があるが、器官を通じて表現する身体を持っている。子どもがその感覚に目覚めると、音を感じたり、音の区別ができたり、音の聞こえる方向に注意を向けたりするだろう⁶。大人が遊具の教えと陶冶（人間形成）の方法を子どもたちの心情や精神、生命にふさわしいものとしてわたし、結果として、子どもたちと共に生きようということが目的である⁷。

さらに、『人間の教育』第二篇「幼児期の人間」においては、

（30）「遊戯は、幼児の発達時期の人間の最も純粋な精神的所産であり、同時に人間の生命全体の、人間およびすべての事物の中に潜む内的なものや、秘められた自然の生命の、原型であり、模写である。そして、喜びや自由や満足や自己の内外の平安や世界との和合をうみだすのである。」⁸としている。

（33）「母親は、球を転がしながら、子どもの身体や四肢の活動を刺戟するのである。（中略）」

母親は、規則的な拍子のとれたリズムのある運動によって、腕と手を使ってのいわゆる子どものダンスによって、すなわち、リズムのある拍子のとれた音声にあわせたりリズムカルな拍子のとれた運動によって、内なる生命を子どもに意識させようとする。（中略）

リズムのある規則的な運動が、幼いころから純粋に発達しておれば、子どものないし人間の、そのつぎの生活全体の中で、極めて有益なものとなるであろう。」⁹としている。

フレーベルの運動遊戯の意義は、子どもたち同士が輪になって身体に触れ合いながら、遊ぶ遊戯により、仲間意識が育ち、楽しむことができるだろうとしている。その集大成として、1850年にアルテンシュタインで行われた遊戯祭を開催し、「より高い内面的な生命の合一」を目指した。地域の子もたちと輪になって手をつないで踊ったり、隊列を組んで練り歩くなど、子どもたち

との仲間意識だけでなく、地域全体、社会全体へ広がりを見せたことだろう。この身体運動から、「前、後ろ、右、左」等の概念を身につけることができ、さらには、仲間の人数を知ること、踊りのリズムの数え方等により、数の概念も認識できると考えられる¹⁰。

少年期に入る子どもは、「学ぶ児童」とし、教育を受ける教授の時期であるとしている。ここでは、家庭内での教育に加え、学校での生活が加わり、意識的に目的を持った知識を身につける時期となる。

少年期の遊びは、幼児期の遊びと違って、いつも一定の目的をもって表現することを目的にしている。その中で知力や道徳心が、遊びにより高められ、明確になり、確実なものになってくる。（道徳心は、正義であり、節度、克己であり、真実の友情などのこと。）

学齢期の教育について、フレーベルは、次のように述べている。

1) 宗教及び宗教教育、2) 自然科学及び数学、3) 言語及び言語教育、4) 芸術及び芸術教育の4つに分け、具体的な教授法を述べている¹¹。

人間の教育（63）には、「芸術の教育」について述べられており、「精神や生命は、自分が創造し、算出し、表現したものに対し、自己の本質を刻み付け、植え込み、自己が表現するすべてのものに対して、自己の本質を持たせなければならない。」¹²としている。さらに「芸術家の精神ないし人間の精神が、芸術作品や人間の作品の中に宿るように、神の精神は、自然の中に宿るものである。」¹³としている。具体的には、「純然たる音響だけによる表現としての芸術が音楽であり、主に唱歌である。（中略）唱歌や素描や絵画や造形はあらゆる面を含み、あらゆる面に及ぶ普遍的な教育ないし、人間形成という面から早くから顧慮されなければならない。」¹⁴としている。

4. エミール・ジャック＝ダルクローズの音楽教育について

エミール・ジャック＝ダルクローズの音楽教育は、「ダルクローズ・リトミック」といい、『リズムが音楽の最も重要な要素であり、音楽におけるリズムの源泉はすべて、人間の体の自然なリズムに求めることができる』という音楽教育の考え方を基にしている。それは、「リトミック」、「ソルフェージュ」、「即興演奏」の3部門からなっている。（北米、英国では、「ユーリズミックス」と言われているが、ここでは、「リトミック」に統一する。）

J＝ダルクローズは、メソッドについて、こう述べている。

「我々の身体の機能と精神力機能の間の親密な相互関係を確立させること…子どもに自分自身を理解させる、生来持っているリズムに気づかせる。私のメソッドは、音楽に基づいている。」¹⁵

「リトミック」は、経験から知覚、知識、認識へと変換される経過のことを示している。「聴く」という行為から、聴覚と身体感覚を通して、身体や心と結びついた筋肉感覚の反応を引き起こすことから始まる¹⁶。それは、聴くことから動きへ、動きから感ずることへ、感ずることから知覚へ、知覚から分析へ、分析から読譜へ、読譜から記憶へ、記憶から即興へ、即興から演奏へというメソッドで、ジュネーブ音楽院のカリキュラムに組み込まれている。

「リトミック」の授業における動きは、2タイプである。

(定位置での動き)	(空間での動き)
拍手、スウィングする、回転 指揮、曲げる、揺れる、話す、歌う	歩行、駆け足、這う、リープ（跳ぶ） スライド（滑るように進む）、ギャロップ スキップ

「即興演奏」を使用する場合は、リズム、メロディ、和声を優しい音楽から複雑な音楽へと、生徒に合わせて変えることができるが、作曲された音楽を使った場合、すでに音楽の和声感等がわかってしまうため、音楽的効果が決まってしまう。しかしながら、作曲された音楽は、音楽的要素を学んだ上で使われることがあるが、初歩の段階では、生徒に合わせて即興的判断ができる為、即興演奏による学習効果は高いと考えられる¹⁷。

5. リトミクの目的について

神原雅之著「リズム&ゲームにどっぷり！リトミック77選」の書籍・冒頭に、リトミックに対する視点が記されている。そこで、J=ダルクローズの著書『リズムと音楽と教育』の文献と照らし合わせ、再確認することとする。（以下、J =ダルクローズは、J=Dと表記する。）

【視点①】「音楽体験の質を高めよう。」¹⁸

「リトミック」は、五感を働かせて、予感するセンスを育むことが大事であるとのこと。

(J=D) J =ダルクローズは、『リトミック論文集：リズムと音楽と教育』第3章の「リズムへの手引き」の中で、「身体的なものと精神的なもの、その両方の原動力と資質、すなわち、耳、音の意識と身体全体（骨格、筋肉、神経）と身体のリズムの意識を併せ持つことを重要視している。

耳で音を聴くことから音に対して意識を持ち、音の比較から旋律や和音を認識する力をつけるのは、五感を働かせることにつながると考える¹⁹。

【視点②】「楽しい音楽参加の機会を提供しよう。」

子ども自身が音楽を選定する価値基準は、「教師」と「子ども」と「音楽」の相互作用である²⁰。

(J=D) 同じく、第2章「学校音楽教育改革論」の中で、「子どもは、自分の身体が参加できる訓練なら、何にでも喜々として興味を抱くものである。この興味を刺戟し、私たちの将来の教育計画に活用しようではないか。この進め方は、人間的なものであり、何一つ憚ることはない。子どもたちと一緒にあって、子どもとして振る舞おう。」²¹としている。

子どもたちと同じ目線に立って、子どもたちを観察することにより、さらに良い教育を考えていこうという狙いがある。

【視点③】「音楽のうねりとコミュニケーションを体験しよう。」

音楽のうねりの中に「どっぷり浸かる」ことから、音楽の面白さや素晴らしさを肌で感じてほ

しい。そして、一緒に音楽をする中で、人との関わり大切さを感じてほしい²²。

（J=D）第5章「リトミック、ソルフェージュ、即興演奏」の中に、『リトミック教育の目的は、学んだあと、生徒たちが、「知っています」ではなく、「やりました」と言って—そのあと、自分を表現したいという欲求を自分の内に生み出すようにすることである。なぜなら、強い感動を味わえば、人は、自分なりの仕方、他の人々にそれを伝えたいという欲求を感じるものなのである。活力が増せば増すほど、私たちの周囲にも活力をあげようとするものである。受け取る、与える、これが人間性の大原則である。』とある。

人間の持つリズムを顕在化する学習は「リトミック」であり、私たち自身の力だけでなく、他の人々の力、をも認知させてくれるという効果をもたらす²³。このことは、人とのコミュニケーションの輪を広げること（協調性）にもつながると考える。

リトミックの授業計画を立てるには、以下の5点の基礎が重要であるとされている。

①即時反応（quick response）

2つ以上のリズムを提示し、それに対し、即座に適合する動きで反応する。

注意力・集中力・分析力を引き出すことにつながる。

②追従（follow）

変化し続けるテンポ、アクセント、強弱、フレージング、アーティキュレーション等に音楽に身を委ねながら、正確に搬送することが求められる。

③置き換え（replacement）

ある要素をすでに学んでいるリズム・パターンに組み込む練習である。

④休止のあるカノン（canon）⇒旋律を一定の時間的感覚をおいて模倣する。

「こだまのカノン」とよばれ、パターンを素早く記憶する能力を育てる。

⑤継続的なカノン

休止のあるカノンより難しく、素早く記憶し、先導する人と2拍遅れで追っかける人がいる。たとえ、与えられたパターンが演奏できなくても、調和と秩序を保てるようにしなければならない²⁴。

以上のように、授業に必要な上記の5つの要素を使いながら、授業計画を立てていくようになっており、日頃からの訓練が大事と考える。その上で、『リズムと音楽と教育』第3章の「リズムへの手引き」の中で、「身体的なものと精神的なもの、その両方の原動力と資質、すなわち、耳、音の意識と身体全体（骨格、筋肉、神経）と身体のリズムの意識を併せ持つことを重要視している²⁵。

上記のように、早い時期に「音を聴く」「歌を歌う」「音楽に合わせてリズムをとる」ことを日々続けていくことは、音楽嫌いの子どもを作らず、この音楽の素養がいろいろなところで開花すると、J=ダルクローズは述べている²⁶。

6. 日本の音楽教育要領について

では、就学前から小学校低学年までの連携した音楽教育は、どのようにしたら良いのか。

そこで、厚生労働省の保育所保育指針、文部科学省から出ている幼稚園教育要領と小学校学習指導要領を見ることとする。

保育所保育指針では、「表現」の分野の内容において、音楽に関する項目は以下のようなものである。

②	保育士等と一緒に歌ったり、手遊びをしたり、リズムに合わせて体を動かしたりして遊ぶ。
③	生活の中で様々な音、色、形、手触り、動き、味、香りなどに気づいたり、感じたりして、楽しむ。
⑥	感じたり、考えたことなどを音や動きなどで表現したり、自由にかいたり、つくったりする。
⑧	音楽に親しみ、歌を歌ったり、簡単なリズム楽器を使ったりする楽しさを味わう。

27

幼稚園教育要領において、「表現」の分野の内容においては、以下のようなものである。

(1)	生活の中で様々な音、色、形、手触り、動き、味、香りなどに気づいたり、感じたりして楽しむ。
(4)	感じたり、考えたことなどを音や動きなどで表現したり、自由にかいたり、つくったりなどする。
(6)	音楽に親しみ、歌を歌ったり、簡単なリズム楽器を使ったりなどする楽しさを味わう。

小学校低学年においては、以下のような内容で指導するようになっている。

小学校学習指導要領 第2章 第6節 音楽

目標	(1) 楽しく音楽にかかわり、音楽に対する興味・関心を持ち、音楽経験を活かして生活を明るく潤いのあるものにする態度と習慣を育てる。 (2) 基礎的な表現の能力を育て、音楽表現の楽しさに気づくようにする。 (3) 様々な音楽を親しむようにし、基礎的な鑑賞の能力を育て、音楽を味わって聴くようにする。
内容	(1) 歌唱の活動を通して、次の事項を指導する。 ア 模範唱を聴いて歌ったり、階名でも模唱したり暗唱したりすること。 イ 歌詞の表す情景や気持ちを想像したり、楽曲の気分を感じ取ったりし、思いを持って歌うこと。 ウ 自分の歌声及び発音に気をつけて歌うこと。 エ 互いの歌声や伴奏を聞いて、声を合わせて歌うこと。
	(2) 器楽の活動を通して、次の事項を指導する。 ア 範奏を聴いたり、リズム譜などを見たりして演奏すること。 イ 楽曲の気分を感じ取り、思いをもって演奏すること。 ウ 身近な楽器に親しみ、音色に気を付けて簡単なリズムや旋律を演奏すること。 エ 互いの楽器の音や伴奏を聴いて、音を合わせて演奏すること。
	(3) 音楽づくりの活動を通して、次の事項を指導する。 ア 声や身の回りの音の面白さに気付いて音遊びをすること。 イ 音を音楽にしていくことを楽しみながら、音楽の仕組みを生かし、思いをもって簡単な音楽をつくること。
	(4) 表現教材は次に示すものを取り扱う。 ア 主となる歌唱教材については、各学年ともウの共通教材を含めて、斉唱及び輪唱で歌う楽曲 イ 主となる器楽教材については、既習の歌唱教材を含めて、主旋律に簡単なリズム伴奏や低声部などを加えた楽曲

	(5) 鑑賞 ア 楽曲の気分を感じ取って聴くこと。 イ 音楽を形づくっている要素のかかり合いを感じ取って聴くこと。 ウ 楽曲を聴いて想像したことや感じ取ったことを言葉で表すなどして、楽曲や演奏の楽しさに気付くこと。
--	---

28

「保育所保育指針」は、平成21年の改定により、従来の養護機能に加えて、教育機能（幼稚園が行う5領域）を持つことが明記されている。「保育所保育指針」と「幼稚園教育要領」において、「表現」の領域での指導がより重要と考えられる。そのことにより、幼児期の教育が、生涯にわたる人格形成の基本となり、感性豊かに、健やかな成長へ導くものと考えられる。

小学校における音楽科は、保育所や幼稚園で幼児期の表現領域の指導を受けてきた子どもたちが、小学校での音楽的発達に加え、生涯にわたる音楽的発達という教育が求められることになる。そこで、小学校音楽科では、表現と鑑賞活動の指導となり、「歌唱、器楽、音楽づくり」の表現の領域と「音楽を聴く」という鑑賞領域の2つになる²⁹。

表現の中の歌唱指導に文部省唱歌を取り上げている。特に小学校の音楽の課題として挙げられている文部省唱歌を知らない大学生が多い。これは、やはり小学校の現場での音楽の授業において、唱歌を取り上げていない、または取り上げても数回歌って終わってしまい、こどもたちの記憶に残っていないのではないだろうか。養成校の使命として、教員を目指している学生に対しては、文部省唱歌をしっかりと覚え、歌われる意義等を理解して、現場に入ってもらいたい。そして、文部省唱歌を子どもたちに歌い継がれてほしいと考える。

幼児期から、「音を聴く」項目が入っているが、身体運動を含む「リトミック」の教育が、幼児期からなされることはとても意義深いことと考える。

そこで、5万人の音楽教師の専門知識を持つ会員を持つ全米の音楽教育者協議会（the Music Educational Conference）が、1970年に全米音楽教育者協議会のために列記されたプログラムを示す円錐型の表によると、幼稚園から小学校低学年の幼年時代の子どもたちにとって望ましい音楽経験について、以下のようにあげている。

全米音楽教育者協議会（the Music Educational Conference）のプログラム

幼稚園	器楽・声楽・周囲の環境から音やリズムを発見する。
小学校	読譜への導入 和声づけ、ラウンド、カノン（輪唱） 旋律づくり 創造的な音楽づくり リズムの養成 個人的な音楽経験

30

全米音楽教育者協議会におけるプログラムも、日本の初等音楽教育要領と類似している。「個人的な経験」という点は、様々な音楽経験が考えられるが、「日本の伝統的な音楽文化に触れ、理解を深める」という点も日本における音楽経験につながるだろう。

今後、音楽教育の現場を視察し、引き続き、検証していきたい。

7. 考 察

フレーベルの音楽教育は、音を聴く、音の聴こえる方向へ耳を傾けることから、内在する感覚を呼び覚まし、さらに、リズム活動においては、腕や手を使うことによって、身体全体に流れているリズムカルな規則を意識し、活動することができ、人としての成長をも助ける。昨年度、アルテンシュタインの遊戯祭について調べたが、現代の小学校の表現活動にも通じるものがあることがわかった。次回、表現活動の現場を見て、検証したい。

また、J=ダルクローズのリトミックは、自分自身がワークショップの体験したこと、乳幼児からのリトミック体験は、音楽に身を委ねられることや、自分の中に内在しているリズムに反応できる即時反応などを含め、音楽的要素を内面から引き出していくことを感じた。リズムを活用したリトミックが、音楽を通して、人を育てる人格形成にも非常に役立つことが分かった。幼稚園・保育園でのリズム活動を小学校に移行した時にも継続して続けていくことが特に必要と考える。

おわりに

乳幼児期から学童期に入る課程で、「表現」として、音楽に関わりを持つ子どもたちが、幼児教育では、音を聴き、歌を歌い、楽器に触れ、リズムを奏でることで音楽を楽しむが、小学校では、音楽を楽しむことより、意味的にとらえることに時間をおかれてしまうこともある。心の底から音楽を理解し、楽しめる音楽の授業づくりを今後も検討していきたい。

(参考文献)

1. ジーニアス英和大辞典、大修館書店、2011年
2. 新村出編、広辞苑、岩波書店、1955年、p.687
3. 佐々井利夫、樋口修資、廣嶋龍太郎著、「教育原理」、明星大学出版部、2012年、pp.4-6
4. 浜田栄夫編著、「ペスタロッシャー・フレーベルと日本の近代教育」、玉川大学出版部、2009年、p.178-179
5. 浜田栄夫編著、同上書、玉川大学出版部、2009年、p.167
6. フレーベル著、小原國芳・莊司雅子訳『フレーベル全集 第四卷』玉川大学出版部、1981年、pp.54-56
7. フレーベル著、小原國芳・莊司雅子訳、同上書、玉川大学出版部、1981年、pp.37-39
8. フレーベル著、荒井武訳、「人間の教育 上」、岩波書店、1964年、p.71
9. フレーベル著、荒井武訳、「同上書」、岩波書店、1964年、pp.86-87
10. 白川蓉子著、「フレーベルのキンダーガルテン実践に関する研究」、風間書房、2014年、pp.210-211
11. 莊司雅子著、「フレーベルの生涯と思想」、玉川大学出版部、2007年、p.122
12. フレーベル著、荒井武訳、「同上書」、岩波書店、1964年、p.205
13. フレーベル著、荒井武訳、「同上書」、岩波書店、1964年、p.217
14. フレーベル著、荒井武訳、「同上書」、岩波書店、1964年、p.326-327
15. L. チョクシー／R. エイブラムソン／A. ガレスピー／D. ウッズ共著、板野和彦訳、「音楽教育メソードの比較」全音楽譜出版社、1994年、p.53
16. L. チョクシー／R. エイブラムソン／A. ガレスピー／D. ウッズ共著、板野和彦訳、同上書、全音楽譜出版社、1994年、p.187

17. L.チョクシー／R.エイブラムソン／A.ガレスピー／D.ウッズ共著、板野和彦訳、同上書、全音楽譜出版社、1994年、pp.64-65
18. 神原雅之編著、「リズム&ゲームにどっぷり！リトミック77選」、明治図書、2006年、p.3
19. エミール・ジャック＝ダルクローズ著、板野平監修、山本昌男訳、「リズムと音楽と教育」、全音楽譜出版社、2003年、p.43
20. 神原雅之編著、同上書、明治図書、2006年、p.4
21. エミール・ジャック＝ダルクローズ著、板野平監修、山本昌男訳、同上書、全音楽譜出版社、2003年、p.40
22. 神原雅之編著、同上書、明治図書、2006年、p.4-5
23. エミール・ジャック＝ダルクローズ著、板野平監修、山本昌男訳、同上書、全音楽譜出版社、2003年、p.77
24. L.チョクシー／R.エイブラムソン／A.ガレスピー／D.ウッズ共著、板野和彦訳、同上書、全音楽譜出版社、1994年、pp.181-185
25. エミール・ジャック＝ダルクローズ著、板野平監修、山本昌男訳、同上書、全音楽譜出版社、2003年、pp.43-45
26. エミール・ジャック＝ダルクローズ著、板野平監修、山本昌男訳、同上書、全音楽譜出版社、2003年、p.60-61
27. 厚生労働省雇用均等・児童家庭局保育課、「保育士保育所指針解説書」、厚生労働省、2008年、pp.89-97
28. 文部科学省、「小学校学習指導要領解説音楽編」、文部科学省、2008年、pp.24-42
29. 初等科音楽教育研究会編、「最新 初等科音楽教育法（改訂版） 小学校教員養成課程用」、音楽之友社、2011年、pp.10-11
30. L.チョクシー／R.エイブラムソン／A.ガレスピー／D.ウッズ共著、板野和彦訳、同上書、全音楽譜出版社、1994年、p.172